

「政治をめぐる若者のつぶやき」 選出3本!

「被災地と他県との間に生じているギャップ」

2011年3月11日、私は福島県郡山市にいた。福島県中通りのため、津波の被害こそなかったが、すさまじい揺れを体験し、自宅も中に入れないほど酷い状態となった。当時私は高校2年生で、春休み期間中であつた。通っていた高校も多大な損害を受け、校舎が使えない状態となり、高校3年生の1年間はプレハブの校舎で過ごした。自宅や学校の周りには仮設住宅も建っていた。また福島県は地震の損害だけでなく、放射能の問題もある。私の住んでいた地域は、第一原発から60キロメートルほどであつたが、震災直後は3.6Sv/hに達するなど決して低い数値ではなかつた。そのような環境で過ごしていたため、震災後私の頭の中から震災のことが離れることはなかつた。

高校を卒業して、私は山形県米沢市にある短期大学に進学し、一人暮らしをはじめた。そのとき私はある違和感をもつた。福島県にいた頃は、至るところに放射線量の検量計が設置してあつたが、当然ながらそれが山形県には見受けられなかつたこと。またテレビで震災について福島県ほど取り上げられていなかつたということだ。福島県にいた頃は、ローカルニュースで震災後の取り組みや、第一原発の状況などが毎日報道されていた。しかし、米沢市に来てみると大きなニュースがない限りあまり報道されていないように私は感じた。それは震災から年月が過ぎるごとに顕著なものになっていった。東北の中でも、宮城県・岩手県・福島県に比べると被害の少なかつた山形県だからなのかもしれないが、同じ東北地方の中でもこうも違うのかと当時私は驚いた。そしてそれは東北を離れた宇都宮市に来てからでも同じであつた。

福島県内の中でも、津波の影響もなく比較的被害の小さかつた地方に住んでいた私でさえこのような違和感を持つたということは、津波の被害を受けたり、放射能の影響で故郷を離れなければならない状況になってしまった被災者の方たちが、より違和感を持っていることは容易に想像できる。中には違和感だけでなく、過去のものとしてされている現状に怒りも覚える人もいるだろう。また、これは他県の人に対してだけではない。県内の中でも被害が大きかつた地域の人からすると、被害に小さかつた人とのギャップを感じるという話を耳にする。

こういったズレは、2014年12月14日に行われた衆議院選挙立候補者のマニフェストでも見受けられた。震災の被害が大きかつた地域で立候補する者は震災復興をスローガンに掲げるが、そういった地方以外で震災復興を第一に掲げる者はあまり見受けられなかつた。まだまだ震災復興が進んでいない今、地方によってこのようにズレが生じてしまっている現状に私は危機感を覚える。

安倍首相はアベノミクスを掲げ、日本の経済状況を良くしようと邁進している。また東京でのオリンピック開催を目指し、そして見事開催地として選ばれた。しかし私はそれをやる以前にやるべきことがあるのではないかと常日頃感じている。そのやるべきこととは、震災復興である。もうすぐ震災から4年が経つが、東日本大震災の被害は多大なものであり、その被害を被災地だけで解決することはどう考えても無理なことである。他人事と考えるのではなく、今一度震災について考え、日本全体で震災復興について考えていかなければならないのではないかと私は考える。

「政治をめぐる若者のつぶやき」 選出3本!

「若者は政治に無関心か」

若者の政治離れが叫ばれるようになって久しい。昨年12月に行われた衆議院総選挙でも顕著になったように、若者の投票率が低い状態が続いている。しかし、本当に若者は政治に対して無関心なのだろうか。選挙における若者の投票率の低さと、政治に対する関心度は関連度があるのだろうか。

ここでは自分の身の周りの事例から考える。結論から述べると、私の周囲にいる同世代の人々は政治に対して関心を持っていると言える。しかし、彼らの多くは政治に対して気軽に話せる場を有しておらず、また、彼ら自身も政治の話をするに対して気おくれしている部分があり、政治の議論をするに対して高尚な印象、あるいは議論することの空虚さを抱えているように感じる。そのため、人と向き合っ政治的な議論をすることもなく、傍目からは政治に対して無関心であるように見えるのだ。

若者が政治に関する議論を日常的に行わない理由として、三つのことが考えられる。まず一つ目に考えられることとして、世間体がある。仲間内に政治的な話題を持ち込むことによって、仲間から異質な存在として見られるようになるのではないかという事を彼らは恐れるのである。これは、昨年しばしば話題となった小保方氏の STAP 細胞の有無をめぐる問題や兵庫県の野々村県議の政治活動費の不自然な支出をめぐる釈明会見などが、世間をにぎわせたことと関係があるのではないだろうか。つまり、自分たちがある程度その話題に対して興味・関心を持ちやすく、良い意味でも悪い意味でも日常的に話のネタとして活用することができる問題に対しては過剰なまでの反応を示すという事だ。

二つ目に、現在の政治に対する不信感だ。具体的にはたびたび報道される政治資金の不透明な流れや、国会や議会における野次、公約違反、不適切な発言がその要因として考えられる。このような政治に対して期待を抱きづらい状況が、結果的に若者が選挙に行かないという現状を生み出していると考えられる。これは若者だけに限ったことではないが、選挙に自分が行くことによって、社会が変わるという実感を持たずにいる人が多いように私は感じる。つまり、彼らは選挙に行く意義を感じるができないのである。

三つ目に、今の若者は政治に対する教育を家庭でも学校でも十分に受けていないということが挙げられる。例えばよく言われることではあるが、アメリカやドイツの若者は政治に対する意識が高いが、それは日本と比べて彼らの多くは幼少期から政治教育を盛んに受けていることに起因する。また、彼らは日本の若者と比較して政治に参加することは義務であるという意識が高いのだ。一方、日本の若者は政治に対する教育は教科書で語句だけ抑える程度しか受けていないため、そうした話題に慣れておらず、身近な生活と結びつけて考えることが難しいのである。

以上、若者が政治意識を持っているにも関わらず、実際に政治参加をしようとする人が少ないことに対する私の見解を述べてきた。本来であれば、政治は選挙権を有する国民が全員参加し意思決定を行うことが望ましい。しかし、どれほど若者の政治離れの解消を訴えたところで、若者が政治に参加する意義を見出すことは一朝一夕にはうまくいかないだろう。若者が政治に積極的に参加するようになるには、他に建設的な手段を投じる必要があると言える。

「政治をめぐる若者のつぶやき」 選出3本!

「なぜ選挙に行くのか」

若者の投票率を見て思ったのが、何故こんなにも選挙に行かない割合が大きいのだろうか、ということである。自分の国の在り方に大きく関わる重要な出来事であるにも関わらず、関心すら示さない人も少なくない。しかし、冷静に考えてみると、上記の話は積極的に選挙に行く人の意見であり、選挙に行かない人にまで当てはまる話ではないだろう。そもそも政治に興味が無ければ調べないだろうし、選挙に行きたいなどとも考えない。自分の一票が直接的に日本を変える事も無い。そのため、「投票に行く」という行動そのものがエネルギーの無駄に見えるのかもしれない。政治に参加することは義務ではない、と捉えている人もいるし、投票先を熟考した結果、どこも甲乙付けられないから投票できないという人も居る。しかし、本質的な理由は、選挙に行くことに意味を見出していないからだと考える。選挙に行くという行為のみに焦点を当てれば確かにそうである。得票率、投票率、当選者、全てにおいて変化はない。ほんの少しだけ変わると言う人が居るだろうが、残る結果には何の変化も無いのが事実だ。そのような現実の中で、投票することそのものに意味を持たせようとするのは、余りにも無茶な話である。

選挙に行かない人にとって疑問なのは、何故そこまでして選挙に行くのか、ということではないだろうか。実際、一票差でひっくり返るような選挙は見たことがない。その一票で政治が変わる、と宣伝されることは多いが、現実ではそのようなことは、ほぼ起きないのだ。投票をすることで政治に対して文句を言えるようになるから、とするのも少々の射ていないように感じる。政治に文句を言うならば、投票することよりも有効な手段がいくらでもある。そしてそれは投票することで保障される権利ではない。同じような考えを持つ人を募って徒党を組んだ方がよほど現実的である。多数派の力が大きくなる民主主義において、一個人の力はあまりにも無力である。同様に、一個人が動かせる個人の数も決して多くない。そう考えると、最も説得力を持ちうるのは「自己満足」ではないだろうか。「情報を集めて、自分なりに政党や候補者を比較検討し、自分に一番近い投票先を決める」という過程に意味を見出している、とするのが個人的に一番理想的な理由になる。しかし、ここまで考えている人はどれほどいるものか分からない。適当に選んでいる人も一定数居るはずである。結局、深く考えずに、行くのが当たり前だから行く、心のどこかで選挙に行くことを強いられているから行くという人が多いのではないだろうか。

「選挙に行かない若者が多い」という問題と向き合っただけで感じたのは、政治を突き詰めて考えるという経験をほとんどしてこなかったということである。確かに、投票することで大きく政治を変えることはできない。政治どころか支持者を直接当選させることも、支持政党の議員を一人増やすことさえも出来ない。しかし、政治と向き合っただけで自分なりの結論を見出すことで、自信を持って政治に立ち向かっていくことが出来る。自分の意見を持ってそれを社会に示すことが出来る。それが選挙の真の目的なのではないだろうか。だから、決して考えることから逃げだしてはいけない。考えることから逃げることはできても、政治が私たちに与える影響から逃げることはできないからだ。それを考慮に加えたうえで選挙に臨んでくれるのであれば、たとえ行き着く結論が「投票しない」事だとしても、私は受け入れたい。